

# 草を分けて

小川未明

青空文庫



兄にいさんの打うった球たまが、やぶの中なかへ飛とび込こむたびに辰夫たつおくんは、草くさを分わけてそれを拾ひろわせられたのです。

「なんでも、あのあたりだよ。」と、兄あにの政まさじ二にくんは指さし図ずをして  
 おいて、自分じぶんは、またお友ともだちとほかの球たまで野や球きゅうをつづけてい  
 ました。

「困こまったなあ。」と、思おもっても、しかたがなかったので、辰夫たつおく  
 んは、しげった草くさを分わけて、ボールをさがしにやぶの中なかへ入はいりま  
 した。

さつきまで、はるぜみが、どこかで鳴ないていました。その声こえが、  
 ぴたりと止とまってしまいました。

「あの、やさしい声のはるぜみをつかまえたいな。」と、思いました。そして、背の高い草を分けて、下の方を見ると、そこには不思議な、静かな緑色の世界があつて、土には、きれいな帽子をかぶつた茸がはえていますし、葉の上には、花びらのついてるように、珍しい蛾が休んでいますし、また生まれたばかりの、おはぐろとんぼが、うすい、すきとおる羽をひらひらさして飛んでいますし、青い、青い色をした、きりぎりすのような虫もいますし、よく見ると、名を知らない草が、かわいらしい花を咲かしたりしていました。

「きれいだなあ。」と、辰夫くんは、ボールを探すことも忘れて、はじめて気のついた、異つた世界の景色に、うっとり見とれた

のです。そして、じつとそこにうづくまつて、

「僕も、お仲間に入れてくれない？」と、いいますと、蛾は相談をしいくのか、ちらちらと飛んで、あっちのしげみに入つてゆきました。すると、おはぐろとんぼも、あわてて逃げ出しそうにしましたから、

「僕は、生まれたばかりの、君なんかつかまへはしないよ。」と、辰夫くんは、おはぐろとんぼを呼びとめました。

おはぐろとんぼは、はじめて安心したように、大きな目をくるくるさせて、

「いま、蛾さんが帰つてきますから、すこしお待ちください。」と、いって、自分は、大きな葉の蔭に姿を隠してしまいました。

たぶん、蛾ががいつて相談そうだんしたのでありましよう。ジイー、ジイーといつて、すぐ近くちかで、はるぜみの鳴なく声こえがしました。

「いいなあ、僕ぼくこんなところに、いつまでもじつとしていたいな。」と、辰夫たつおくんは、思おもいました。そして、もう、ボールなど探さがしに入はいって、この小ちいさいお友ともだちを驚おどろかしたりしたくはなかつたのです。

このとき、兄あにの政まさじ二くんのかけてくる足音あしおとがして、

「辰夫たつお、まだ見みつからない？」と、いいましたので、辰夫たつおくんは、  
「見みつからないよ。」と答こたえました。

「おかしいな。」と、いつて、政二まさじくんは、大おおきなくつで、草くさの上うえを遠慮えんりよなしに踏ふんで入はいってきました。虫むしたちは、どんなに驚おどろ

いたかしれません。たちまち大騒ぎおおさわとなりました。

「なければ、いいよ。もうお昼ひるだから、お家うちへ帰かえろう。」と、政ま二くんさじは、いつて、やぶの中なかから出でました。辰夫たつおくんも、つづいて出でました。

「兄にいさん、午後おひるから釣つりにいくの？」と辰夫たつおくんはききました。

「いくかもしれない。」

「つれていつてね。」

しかし兄にいさんはだまっています。ご飯はんを食たべてしまうと、政ま二くんさじは、釣つりざおを出だして用意よういをしました。

「兄にいさん、僕ぼくもつれていつてね。」と、辰夫たつおくんは、また頼たのんだのです。

「みみずを取っておいで、つれて行ってやるから。」

辰夫たつおくんは、すぐにみみずを取りとりにいきました。しばらくするとぼんやりと帰かえってきて、

「どこにも、みみずはいないよ。」と、いいました。

「じゃ、つれていかない。」と、政二まさじくんがいました。

辰夫たつおくんは、泣なき出だしてしまいました。天気てんきがつづいて、みみずのいそうなところを探さがしてもいなかっただけでした。

さつきから、このようすを見てみいたお姉ねえさんは、

「なんで、そんな意地悪いじわるをするんですか。釣つりにいくときは、道具どうぐをみんな小ちいさな弟おとうとも持もたせるくせに、機嫌きげんよくつれていかれないのですか？」と、政二まさじくんにおっしゃいました。



「いっても、じきに帰るといふから、いやなのだよ。」と、政二くんは、答えました。

「うそだい、僕に、さおを一本も貸してくれないんだもの、僕つまらないから、帰るといつたんだよ。」

「なぜ、一本ぐらいさおを貸してやらないのです。」

「釣れはしないんだ。ただ、針を引っかけて糸を切つてしまふばかりだもの。」

こう、政二くんがいうと、辰夫くんは顔を赤くして、

「だれが、もうボールなど拾つてやるものか。」といいました。

「だれが、釣りになど、つれていつてやるものか。」と、政二くんがいました。

「辰夫さん、つれていってもらわなくても、晩ばんに、お姉さんねえが、夜店よみせへつれていってあげるから。」と、お姉さんねえがおつしやいました。

辰夫たつおくんの機嫌きげんは、すぐに直なおつてしまいました。兄にいさんたちが、釣つりにいった後あとで、原はらっぱで、ほかのお友ともだちと遊あそびながら、晩ばんになるのを楽たのしみに待まっていました。晩ばんになりました。政まさじ二くんはお姉ねえさんと辰夫たつおくんが出でかけるのを見みても、やせ我慢がまんをして、つれていつてくれといいませんでした。

「辰夫たつお、金魚きんぎよを買かつてもらつてこいよ。」と、ただ一言ひとこと、政まさじ二くんさじは、いつたきりです。

辰夫たつおくんとお姉ねえさんは、明あかるい金魚屋きんぎよやの前まえへ立たちました。た

くさんの色とりどりの金魚きんぎよが浅いおけあさの中で泳いでいました。

「まあきれいなこと。」と、お姉さんねえはおつしやいました。しかし、ほんとうなら、日が暮れると、すべての魚たちは、水草みずくさの蔭かげに隠れて、じつとして眠るのであるが、この金魚たちは電燈でんとの光ひかりに照らされて、子供らの出す、さおの先さきについている針はりに追いまわされているのでした。

「辰夫さん、あんたも釣つてごらんなさい。」と、お姉さんねえはおつしやいました。

辰夫くんは、無理やりに、針はりの先さきにひっかけて、金魚きんぎよを釣るつ気きになれなかつたのです。

「かわいそうだもの、僕ぼく、金魚きんぎよをほしくないよ。」と行って、

辰夫くんは、その前からまえはなれたのでした。

「せつかくきて、つまらないじやないの、なにかほかのものを買かつてあげましょうか。」と、お姉さんねえはおつしやいました。

二人は、並ならんだ店みせを見みながら、歩あるいていました。

「あれは、なんですか？」

「海うみほおずきよ、きれいですね。」

「僕ぼく、あんなの、ほしいけど。」

「女おんなの子この持もつものよ。」

「買かつては、おかしい？」

「おほほほ、ほしければ、私わたしが買かつてあげますから。」

「僕ぼく、ここに待まっているよ。お姉さんねえ、買かつてきておくれ。」と、

辰夫くんはいいました。

「まあ、恥ずかしがりやね、そんならここに待っていらつしやい。  
」と、いつて、お姉さんは、海ほおずきを売る店の前へいかれました。

辰夫くんは、今日、やぶの中で見た、不思議な世界のことを思い出していました。

貝がらのような蛾、赤い茸、おはぐろとんぼ、いい声で唄をうたうはるぜみなど。そして、またこの海ほおずき。なんとという美しいことであろう。しかし、金魚を買わずに、海ほおずきを買って帰ったら、きつとお兄さんが笑うとは思ったけれど、辰夫くんは、やはり、金魚をいじめたくなかったのです。



## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「せうがく三年生 13巻3号」

1936（昭和11）年6月

※表題は底本では、「草《くさ》を分《わ》けて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 草を分けて

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>